

メイド文化と言語学  
川原繁人  
慶應義塾大学  
言語文化研究所

## 1. はじめに

この論文の原稿依頼がきたとき、正直引き受けていいものか迷いました。なぜなら私はアメリカでの研究生活が長く、日本語で論文を書くことも慣れておらず、また秋葉原メイド文化に関しても、そこまで専門的に掘り下げて研究した自信がないからです。それでもこの原稿を書こうと思ったのは、まずメイド文化（メイドの名前付けとメイドの声）を言語学的に見ていくことで、言語一般に共通する規則性が多少なりとも明らかになった、という嬉しい発見があったからです。そして、言語学の入門というのは、必ずしも楽なものではないけれども、こういう身近な題材を使えば多少なりとも、言語学に触れたことのない人でも、言語学の概念に親しめるのではないかと思ったからです。

そういう意味で、この原稿では「言語学からみたメイド文化」であり、同時に「メイド文化からみた言語学」を目指したいと思うわけです。まず、この二つの点に関してもうちょっと掘り下げてみることから始めます。まず一点目ですが、メイド文化とは、表面上は（誤解を恐れずにいいますと）キワモノであり、何か「異質なもの」として考えられるかもしれませんが、しかし、研究対象としてじっくりメイド文化の言語学的特徴を見てみると、必ずしも異質ではなくて、むしろ人間言語の原則に則ったものである、ということが分かります（余談ですが、筆者は過去に日本語ラップやダジャレに見られる規則性などを研究していたこともあり、こういう一般的に言語学では扱われない現象に言語学的パターンを見いだすことが好きなようです）。

二点目ですが、以下の議論では、メイド文化について音の面からアプローチしていきたいと思っています。ただ、この音という概念は意外に難しいです。音というものを理解するためには、例えば音響を含むので、物理や数学が関わってきます。音声学の授業を教え始めて数年経ちますが、高校時代の数学や物理の授業を思い出して音声学が嫌になってしまう学生が必ずでてきます。2012年にメイドの音声学的研究を始めたとき、国際基督教大学でメイド声の音声学的研究という授業を持たせてもらい、思いのほか好評でした。その経験から、もしかしたらこういう題材を使って音声学にアプローチしていけば、学生たちにも伝わりやすいのではないかと思うようになりました。

というわけで、本稿は言語学に全く触れたことがない人にも音声学の基礎が分かるように、また、音声学の基礎的概念がどのようにメイド文化の分析に貢献するかについて論じていきたいと思っています。もしこれを機会にメイド言語学にとどまらず、言語学一般（とくに音声学）に興味をもつ人がでてきてくれれば、望外の喜びであります。同時に、

メイド文化も必ずしも異質なキワモノものでなく、一般言語と同様なきれいなパターンがでてくるのだと示せば、それもまた喜ばしいことです。

なお原稿の性質上、普通の学術論文のように細かい出典を明記することは避けませんが、3節はShinohara and Kawahara (2013)、4節はKawahara (2013)が基になっていますので、そちらを参照していただければ幸いです。<sup>1</sup>

## 2. 音声学の基礎

まず、音声学の基礎概念からちょっと解説しますが、ここがちょっと面倒というか、始めは意味が少しわからないかもしれません。実際私が言語学を習いだした時も、どうしてこのような概念を使わなければならないのかという疑問が常に消えませんでした。しかし、以下でメイド文化の分析をする際に、こういう概念が役に立つ、ということを示せば、音声学者が使っているこういったものが有用なものだと分かって頂けると思います。ですので、少し我慢をして音声学の基礎を学んで頂いて（分からない部分は飛ばして読んでみて、また戻ってきてもらえれば、と思います）、その基礎がメイド文化の解明にどのように役に立つのか少しでも感じて頂ければな、と思います。

では、まず子音を説明するために、子音に関する2つの概念（調音点と調音法）の解説から始めます。第一に、口のどの部分を使うか（調音点）です。例えば、パ、バ、マを発音するとき、両唇が閉じます（手鏡なんかで自分の口を映してみるとよく分かります）。唇が閉じるため、こういった音を唇音と呼びます。音声学ではこれらの音を[p, b, m]という記号で書き表します（この記号は英語で習う発音記号とほぼ同じものです）。次に、タ、ダ、サ、ナは舌先と歯茎（上の前の歯の根元）のあたりを狭めたり閉じたりします（自分で発音してみてください。また、スの口の形をして息を吸い込んでみてください。冷たく感じる場所があるはずで、そこが歯茎です）。これらの音は舌先音と呼び、[t, d, s, n]で書き表します。最後に、カ、ガでは舌の後方である舌背を閉じるので舌背音と呼び、[k, g]で書き表します。このような違いを調音点と呼びます。

今回もっと大事になるのが、調音法というものです。例えば、[t]と[s]を比べてみましょう。[t]は「トゥ」の「ウ」を発音する直前の状態です。このとき舌と歯茎を完全に閉じているので、これを閉鎖音と呼びます。一方、[s]は「ス」の「ウ」を発音せずに「スー」と息を吐いたものです。このとき、舌と歯茎はわずかにすき間が空いてスーと

---

<sup>1</sup> Shinohara and Kawahara (2013) The sound symbolic nature of Japanese maid names. Proceedings of Japanese Cognitive Linguistics Association. pp. 183-193.

いう騒音（ノイズ、摩擦）が聞こえるので、摩擦音と呼びます。また、唇を閉じて「ンー」と言い続ける[m]なんかは鼻に空気が抜けるので、鼻音といいます。

下の表（表1）では、この調音点と調音法に基づいて、それぞれの子音の特徴をまとめています。調音法は上から下に行くにしたがって、口（と鼻）の開きが大きくなります。閉鎖音は完全に口がとじた音ですね。摩擦音では、口が微妙に開いているためにそこで摩擦が起こります。鼻音では口は閉じているものの、鼻に空気が抜けるため、鼻腔は開いているものとみなされます。一番下に位置する半母音とよばれる[w, y]（ワやヤの子音）は口がほとんど閉じません。

		唇音	舌尖音	舌背音	声門音
阻害音	閉鎖音	p b	t d	k g	
	摩擦音		s z		h
	破擦音		ts		
共鳴音	鼻音	m	n		
	流音		r		
	半母音	w		y	

表1：調音点と調音法による子音の分類

ここで表1にでてきている、阻害音と共鳴音という違い（一番左）に注目したいと思います。口（と鼻）の開き順に並べて、上から3行を阻害音、下から3行を共鳴音と呼びます。私自身、言語学入門を履修した時に、この定義だけを教わって「???」となった覚えがあります。なんでこんな分類をしなければならないのか分かりませんよね。でも、この分類が大事だっていうことがメイドの名前のパターンから分かってきますので、下ではその点を強調します。今の時点では、阻害音を「日本語において濁点が付く可能性のある音」と考えて頂いてさしつかえないです。（ナ行とかマ行などの共鳴音は普通、濁点がつく可能性すらありませんよね。）

次に母音ですが、母音は発音するときに (i)舌の前のほうが盛り上がっているか、後ろのほうが盛り上がっているか、(ii)それから舌が上に上がっているか下がっているかで特徴付けられます。例えば[a, i, a, i]と繰り返してみると口が開いたり閉じたりして、舌の高さが変わっていくのがわかると思います。また[e, o, e, o]というようにすると舌が前後するのがわかるかと思います。

	前舌音	後舌音
高舌音（閉母音）	i	u
中舌音	e	o
低舌音（開母音）		a

表2：母音の分類法

### 3. 音象徴とメイドの名前

それでは、難しい音声学の話は一応一段落としまして、まずは第一のメインピックとして、メイドの名前がどのように付けられるのか、という問いについて考察してみたいと思います。これは、音象徴という現象に関するもので、問題意識としては古代ギリシャ、プラトンの時代から議論されている問題です。

#### 3.1. 音象徴とは

ではまず、音象徴とは何か。問題は、音と意味の間につながりがあるかということです。近代言語学の基礎を作り上げた偉大な言語学者の一人にソシュールという人がいますが、この人は「言語の恣意性」ということを一般言語原理の一つとして掲げました。つまり、音と意味の間に必然的なつながりはない。もしあったとするならば（これは極論ですが）全ての言語で、ある意味に対して同じ音が使われてなければおかしい。日本語で“ある四足動物”のことを[inu]と呼び、英語で[dog]と呼ぶことは全くの偶然であり、その四足動物をある特定の音で表現する必要はない。これが恣意性の原理です。

一方でこの立場に反論し、音と意味には（多少なりとも）つながりがあるという意見もあります。この立場の近代的な流れの代表として、これまた近代言語学の基礎を作り上げた言語学者サピアの実験が有名です。この実験では、英語話者に、ある未知の言語で、「大きなテーブル」と「小さなテーブル」に該当する別々の単語があると仮定させました。また、その二つの単語はmilとmalである、と。そして英語話者にmilとmalのどちらが大きなテーブルで、どちらが小さなテーブルかを判定させました。

この実験の結果を伝えるまえに、少し自分なりに考えてみてください。

おそらくmilのほうが小さくて、malのほうが大きいと考える人が多いのではないのでしょうか？つまり、[i]は小さくて、[a]は大きいのです。このように音そのものに意味が付随しているような現象がみられ、そのことを音象徴と呼びます。

この音象徴のパターンですが、あくまでそういう傾向があるというだけで、いろいろな例外があります。例えば、[i]は小さいと言っても、英語でbigという単語があるわけで、これは例外です。ただ、サピアのように実験をしてみたり、ある言語の単語を網羅的に見てみたりすると、そうなることが統計的に多いということです。

また最後に付け加えると、音象徴は多くの場合、音声的にしっかりと説明できるパターンが多いのです。例えば、[a]というのは“大きなイメージ”に結びつけられる母音ですが、これは“口が大きく開く”から、と説明できるでしょう（自分で発音してみましよう、表2も参考のこと）。この「ある音の音声学的特徴とそのイメージのつながり」という点もメイドの名前付けに見られるポイントとなります。

### 3. 2. 名前の音象徴

さて、以下でメイドの名前に音象徴の原理が関わっていることを示すわけですが、その前に少し名前に現れる音象徴について説明したいと思います。英語なんかではかなり色々分析されているのですが、上で説明した阻害音と共鳴音がそれぞれ男性、女性に結びつきやすい、と言われていました。たとえば、Eric（男性）とErin（女性）なんかは最後の音を見てみると、[k]が男性で、[n]が女性ですね。

ここで阻害音と共鳴音の違いってというのが大事になってくるわけです。（なかなか言語学入門の授業ではこんな話にはならないでしょうが。）

さて、なんとなくでもいいので、日本語でどうだろう、と考えてみてください。「カ行、サ行、タ行、ハ行、パ行」（阻害音）と「ナ行、マ行、ヤ行、ラ行」（共鳴音）を比べてみてください（ちょっと濁点は除きますね。）。どちらがより男性的で、どちらがより女性的な音かっていうイメージはわかりますでしょうか？

少し考えてみると、阻害音＝男性的、共鳴音＝女性的、というイメージをもった人もいるのではないのでしょうか。このイメージが正しいかを客観的に確かめるために、明治安田生命の人気ベスト50の名前を分析してみました。リストされている名前の子音の種類を、男性名女性名それぞれで数え上げてみました。その結果、以下のようなパターンがでてきました。

	男性名	女性名
阻害音	67 (64.4%)	35 (32.7%)
共鳴音	37 (35.6%)	72 (67.3%)
合計	104	107

表3：明治安田生命の人気名前リストに見られる音の分布

やはり男性名では阻害音が多くでてきて（64%）、女性名では共鳴音が多く出てきますね（67%）。こういう背景があって、「ではメイド名では. . .」という疑問が湧いてきたのが2011年の年末です。

### 3. 3. メイド名の音象徴 1

先取りして言えば、私が始めに立てた仮説は間違っていました。間違っていたのは色々な理由があるのですが、ここは時系列順に私の思考を追ってみることにします。

上の表3の日本語の名前のデータを見て、始めに思いついたのは「秋葉原のメイドさんたちは、女性らしさをアピールしているのだから、上のパターン（共鳴音＝女性らし

い) という傾向がより顕著にでるに違いない」ということです。これを検証するために、@ほお〜むカフェのウェブサイトに行って、そのメイドさんたちの名前にでてくる音を数え上げてみました。大手だけありまして、当時(2011年11月)の時点で133人もの名前がリストされていました。(読み方が分からないのもありますから、漢字の名前を除いています。)

しかし、結果は残念なことに、295の子音中、171が共鳴音で、比率としては58%でした。一般的な女性名(67%)よりも共鳴音の割合が低いとでてしまいました。仮説と反対の結果がでてしまったわけです。そこで秋葉原のメイドさんたちに実際にどうやって彼女達が名前を選んでいるかについて色々聞いてみることにしました。

その結果、まずメイドさんがメイド名を選ぶ場合、必ずしも音の感じで選んでいるわけではない、ということが分かりました(今考えれば、当たり前といえば当たり前ですね)。メイドさんは好きなアニメのキャラクターの名前や、好きな食べ物や花の名前を基にして自分の名前をつけることが多い、また同じ店舗の中で同じ名前をつけられないし、引退した方とカブっても困る、さらには、やはり競争社会(?)ですから、目立った名前を付けたい、ということで国民的アニメキャラの名前を借りているという証言も得られました。

さらに秋葉原で実際に話を聞いてみると、「秋葉原のメイドさんたちは、女性らしさをアピールしている」という根本的な前提が間違っているのでは、と思うようになりました。きっかけになったのは、「銀狐(ぎんこ)」さんという名前のメイドさんで、「しっかりとしたお姉さん」的な役割を担っている方だそうです。

### 3.4. 実験

そこで仮説を思い切って変えてみることにしました。こういう分け方が正しいのか疑問の余地は残りますが、メイドさんにも「ふわふわして、かわいらしい」というイメージの萌え系の方と「しっかりしていて、ちょっと近寄りがたい」というイメージのツン系の方がいらっしゃるのかもしれない、と。少なくとも、そういう分け方が可能であるのでは、と考えたわけです。(後から、「萌え」の概念の中に、ツンがあり(そこにデレが入ることで萌えが完成する)、この二つの区別は必ずしも正しいものではない、との指摘がありましたが、この実験では、この区別をもって議論を進めます。)

そしてこれは、当時の私と共同研究者の篠原和子先生の実感ですが、ふんわりした萌えのタイプに共鳴音が合致して、つんつんタイプに阻害音が合致しているような印象を持ちました。

というわけでまた実験をしてみました。まず実験用に三文字(=三拍)の(実際には存在しない)名前のペアを作りました。ペアごとに母音は統一して、一つの名前は阻害音

だけを含み、一つの名前は共鳴音だけを含んでいます。たとえば、「さてか(sateka)」と「らめな(ramena)」ですね。このようなペアを10個作りました。仮説としては、阻害音はツン系のメイドさんの名前だという印象を持ちやすく、共鳴音は萌え系のメイドさんの名前に結びつけられる、ということになります。

それぞれのペアについて、秋葉原で実際に働くメイドさん10人に、どちらの名前が萌え系で、どちらの名前がツン系かという判断をしていただきました。結果としては、74%の確率で阻害音がツン系の名前と結び付けられました。これは偶然によって起こりえる確率(50%)よりも統計的に高い数値です。実際に、10人全員が50%より高い割合で阻害音をツン系の名前と結び付けました。

実際にあとで感想を伺ってみると、「サ行の名前はツンっぽいけれどラ行は萌え系っぽい。。不思議。」とか、「サ行とタ行がツンっぽい。ラ行が萌えっぽい。」というような予想通りの結果が帰ってきて、なるほどやはりメイドさん自身も同じようなことを考えているんだな、と感じました。

つまり阻害音=ツン、共鳴音=萌え、というのはある程度しっかりとした形で、メイドさんの意識の中に内在するのだ、という結論が得られたわけです。またこのあとの追加実験として、メイドさんでない日本人や、さらに英語話者でも同じ実験をしてみました。同じような結果がでてきました。阻害音=ツン、共鳴音=萌えというつながりは、メイドさんだけが持っている特殊な感覚でなく、もしかしたら言語や文化を超えた何かなのかもしれません。

これだけでも十分面白い結果だと思うのですが、音響学的にちょっと突っ込んでみるともっと面白いことが見えてきます。まず下図(図1)に[t]と[y]の音の音響グラフを提示します(専門用語では音声波形といい、空気の圧力レベルの変化を表示したものです)。

まず左図の[t]ですが、破裂音である[t]は、口が舌で一度完全に閉じられます。その口が完全に閉じられている間も、空気は肺から口のなかに入ってきますので、口の中で気圧が高まります。その結果、口を開いたときに破裂が起きます。その破裂というのが、誤解を恐れずに大胆にいいますと、左図に見られるように、形状がツンツンしているわけです。一方、共鳴音ですが、右図に[y]の音を表示しますが、どちらかという、形状として丸みを帯びた形になります。

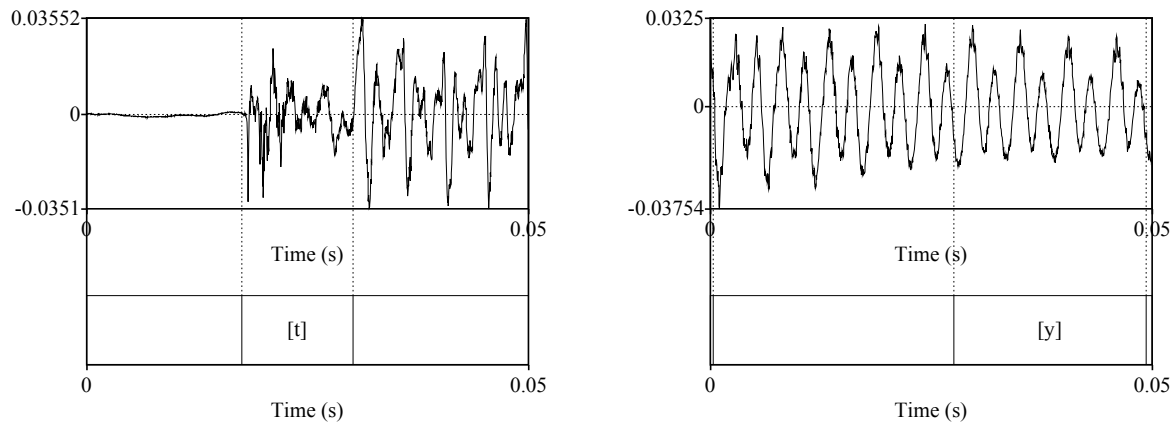


図1：[t]と[y]の音波グラフ

つまり、メイドさんたちは、こういった、音響的な「尖り」や「丸み」を、「ツン」とか「萌え」という概念に無意識に結びつけている可能性があるわけです。こういったわけで、メイドの名前付けというのを見てみると、決して異質でランダムなものではなくて、音響的に納得できる原則に基づいているのだと感じられたわけです。

## 4. メイド声の音響分析

さて、次はメイドの名前付けから少し離れて、メイド声そのものの分析について、ちょっと解説したいと思います。メイド声を聞いた方なら、誰しもその特徴的なパターンに気付くと思います。その特徴を音響的に分析してみたいと思ひまして研究してみたところ、非常に奥深く、まだまだ表層的なことしか分かっていないのですが、その結果をちょっとまとめたいと思います。

実験の内容としては、プロのメイドの方に地声とメイド声で色々な文やフレーズを発音していただきました。

### 4.1. イントネーション

まずメイド声は「声が高い」という印象を受けましたので、イントネーションが測りやすい文を読んでいただき、その文の声の高さを分析しました。こういう場合、障害音を入れてしまうと空気の流れがとまってしまっていてイントネーションが測れないので、共鳴音を主とした文を作ります。今回は、単純な「主語-目的語-動詞」の文を4つ用意しました。例えば、「森村がアマリヤを哀れんだ」のような文です。声の高さとは厳密にいうと、基本周波数 ( $f_0$ ) と呼ばれるものであり、声帯が一秒間に何回震えるかを示します。単位はヘルツ (Hz) です。



同じ文を地声で4回、メイド声で4回読んで頂きました。このセットで、二回繰り返してもらいました。よって、一文につき、それぞれの声で8回、これが4文あります (=32データポイント)。全部の文の共通するイントネーションパターンを計算するために、主語、目的語、動詞をそれぞれ15等分し、それぞれの区間で32回の平均をとりました。それを組み合わせると、図2のようなパターンが抽出できます。下図で、○のついた曲線がメイド声で、△で表された曲線が地声です。

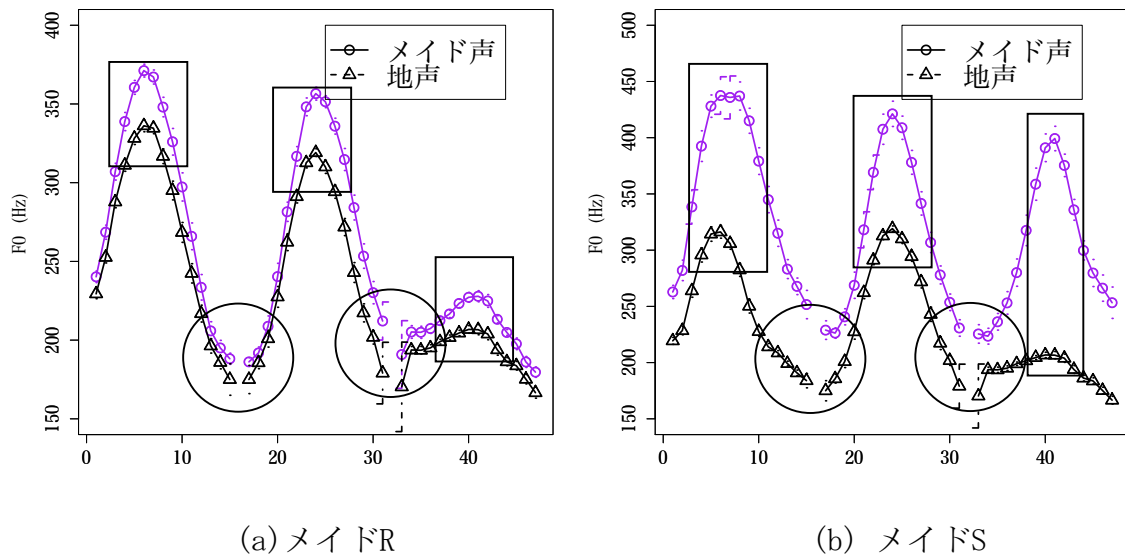


図2：メイド声と地声のイントネーション比較

まずどちらのメイドも、メイド声のほうが声が高いことが分かりますね。しかし、2人の中でパターンが多少異なっています。メイドRさんは、低い地点（○で囲んでいます）ではメイド声と地声がそこまで違いがなく、高いところ（□で囲んでいます）で違いが大きくでています。

それに対して、メイドSさんは低いところ（○の部分）と高いところ（□の部分）の両方で違いがでています。しかし、それでもメイドSさんも高いところの違いが、低いところの違いよりも大きいですね。このように、メイドさん2人で多少の違いはあるものの、メイド声のときに「高い部分での変化が大きい」という共通性があります。実はこれ、人間言語のイントネーションの特徴で、文のある部分を強調して読むときにつける抑揚のパターンともとても似ています。人間言語では抑揚をつけるとき、低いところよりも高いところを操作する傾向にあり、その傾向がメイド声にも現れているわけです。

つぎに、メイド声ではゆっくりしゃべっているのか、という疑問が生まれます。イントネーションの抑揚が大きくなっているわけですから、その大きな変化を生み出すのに時間がかかるのではという問いが生じたわけです。そこで、地声とメイド声で、それぞれ主語と目的語の平均発話時間を測ってみました。

メイドR	主語	目的語
地声	56.8	55.1
メイド声	56.4	55.2
メイドS	主語	目的語
地声	56.2	55.8
メイド声	53.6	55.9

表4：主語、目的語の平均発話時間（単位はミリ秒）

表4の結果を見てみると、2人とも、主語でも目的語でも、地声とメイド声であり差がありません。こう見ると、メイド声でゆっくりしゃべっているというわけではないようです。というわけで、（確認のために）平均で每秒何ヘルツ声の高さが変化しているか計算してみました。（図2のように、主語、目的語それぞれで、声の高さが上がって下がりますので、上り下りを別々に計算しています。）

メイドR	主語-上り	主語-下り	目的語-上り	目的語-下り
地声	5.1	-4.0	6.2	-6.4
メイド声	6.3	-4.8	6.9	-7.6
メイドS	主語-上り	主語-下り	目的語-上り	目的語-下り
地声	5.9	-3.3	4.3	-2.8
メイド声	9.9	-8.9	9.6	-8.9

表5：主語、目的語の平均声帯振動数変化（＝声の高さの変化）

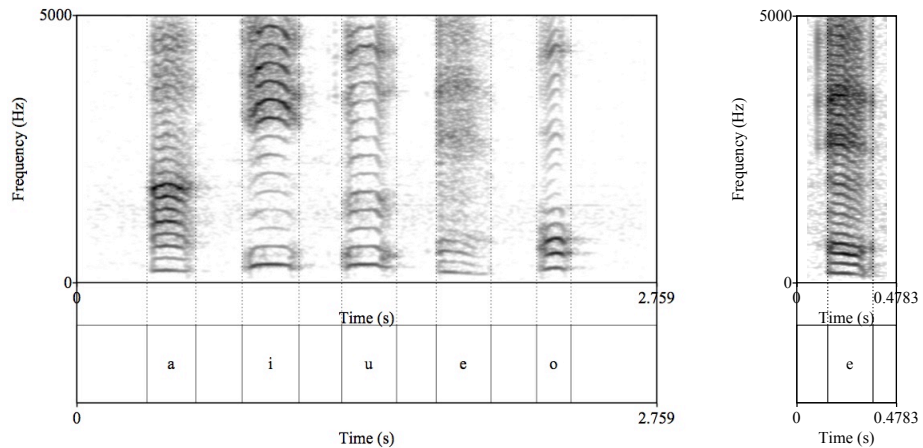
やはり、どの部分を比べてみても（主語、目的語、上り、下り）、メイド声のほうが平均変化率が高くなっています。つまり、メイド声は「毎秒当たりの声の高さの平均変化率が高い」という特徴を持っている、と結論付けられそうです。簡単に言って、声の高さの変わり方が早いわけです。

## 4.2. あいうえお

次に母音の発音のいろいろな特性を測るために「あいうえお」を色々な順番で読んでいただきました。第一に、これは録音しているときから明らかだったのですが、メイドRさんがとても面白い特徴的なメイド声をだしてくれました。「あいうえお」と読んでいるときに「え」がとても特徴的だったのです。実際に音声を聞いていただけなのが残念ですが、国際基督教大学でこの講義をしたときに「どの母音が一番かわいいか」という質問をしたところ、「え」が一番可愛い、という反応が一番多かったです。

ひとことで言って、「え」の部分で声帯が大きく開いていて、優しい印象を受けました。ちょっと息がもれる感じとでもいいでしょうか（専門用語でbreathy vowelと呼びます）。これを実際に確認するために、声紋分析にかけてみました（図3）。左の図が、メイド声の「あ、い、う、え、お」です。横軸が時間、縦軸が周波数、黒い帯がエネルギーの分布を表しています。5個の母音を比べてみると、特に高い周波数帯で「え」の横の黒帯

があまりはっきり見えてないことがわかります（高い周波数帯にエネルギーがない、ということです）。理由は専門的になるので、省略しますが、この声紋パターンは声帯が大きく開いていると考えられます。比較のため、右図に地声の「え」の声紋分析を示しますが、やっぱり横縞がはっきりできていますね。



(a) メイド声の「あ、い、う、え、お」

(b) 地声の「え」

図3：メイドRさんの声紋分析

実は日本語の五つの母音を「あ、い、う、え、お」だけでなく、色々な順番で録音したのですが、メイドRさんは後ろから二番目の音に、この特徴的な声帯の開きをだすようです。実際にこのメイドさんの発音を聞いてみると、声帯が大きく開くと音の強さが弱まりますので、優しい印象を受けます。国際基督教大学の講義を受けて、実際に発音を聞いた学生の中からは「最後から二番目を優しくすることで、最後のかかわいさがより引き立っている」といった意見もでました。

ではメイドSさんはこういったパターンを示したのでしょうか。メイドSさんは後ろから二番目の母音に声帯の開きがかかる、というパターンではなく、むしろメイド声になると全体的に元気に発音するようになるようです。図4に、彼女の「あ、い、う、え、お」の発音の音の大きさを線グラフで示します。縦軸が音の大きさをdB（デシベル）で表しています。

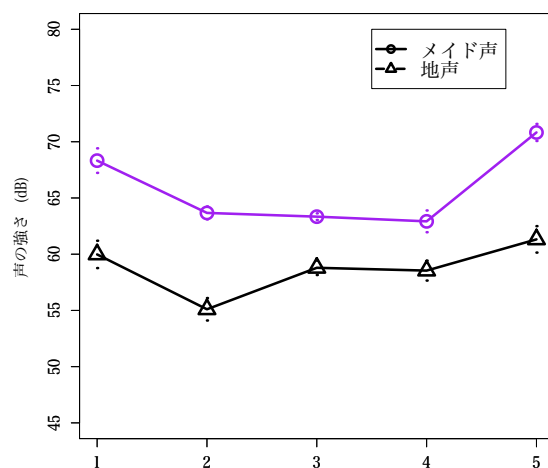


図4：メイドSさんの声の大きさ比較「あ、い、う、え、お」

メイド声が○で示された曲線ですが、どの母音を取ってみても、やはりかなり大きな声で発音されるようになるみたいですね。

### 4.3. 母音空間

最後に母音空間というものを計測してみました。母音空間とは、それぞれの母音において、舌（と唇）がどのような位置で発音されるかを表したものです。現在の音声学のツールを使うと、音響データをもとに、それぞれの母音がどのように発音されているかある程度正確に計測することが可能です。

まずメイドRさんですが、図5で、左が地声、右がメイド声です。縦軸は口の開き（舌の高さ）を表していると考えてください。下に行くほど口が開いて、舌が下がります。上に行くほど舌が上がって口が閉じます。横軸は左に行けば行くほど、舌が前にでていて、かつ唇が横に開いていることを示しています（「いだ」と不満を言ったときに強調される動きです）。

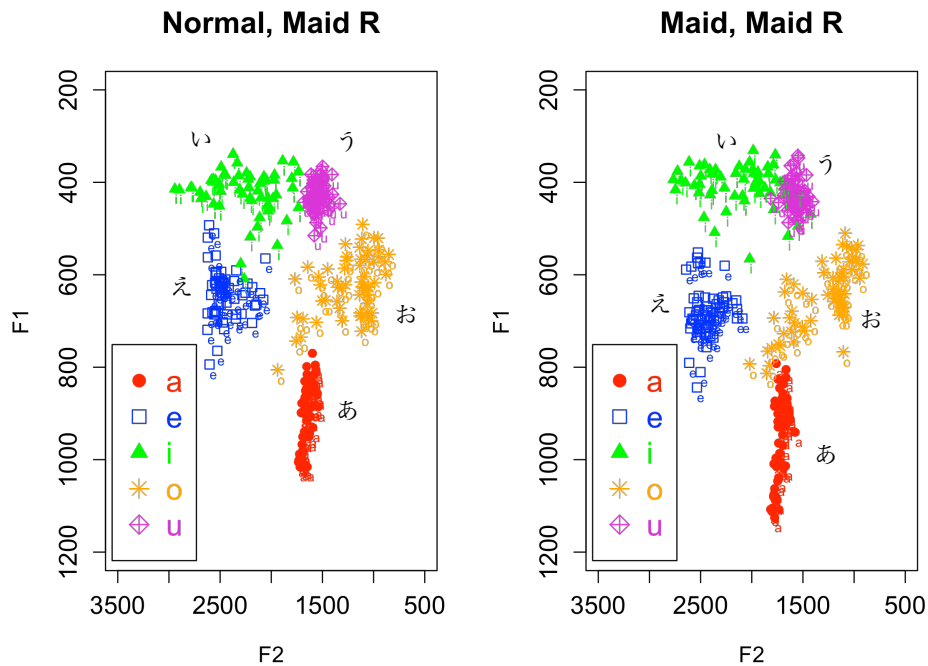


図5：メイドRさんの母音空間

じっくり見てみると、まず[あ]の母音で口の開きが大きいがわかります。また[い]の点が全体的に後ろにシフトしていますね。これはおそらく[い]を発音するときには、一般的には唇が横に広がることが多いのですが、その開きが少なめなことを表しているのだと思います（ちょっとメカニズムとしてはややこしいので、詳細は省きますね）。唇の横への開きが少なめで、やさしい印象をうけるメイド声です（不満を言うときに使う「いーだ」で強調される口の開きが非常に弱くなっているのです）。上で論じた「あ、い、う、え、お」で、後ろから二番目の母音に、声帯の開いた音が出てくる発音の仕方（図3）にも関係あるのかもしれませんが。このメイドさんはメイド声によって「やさしさ」というものを目指しているのかもしれませんが。

図6で示しているように、メイドSさんはもっと地声とメイド声にはっきりとした違いがでていて、[う]の点がメイド声でだいぶ後ろに来ています。これはおそらくメイド声で唇が丸まっていることを示しています（唇が丸まって、母音空間が前に広がるので、舌が相対的に後ろに下がっているように計測されるわけです）。また[い]が非常に前にでてきますね。唇の横へ開きも大きくなっているのでしょう（「いーだ」のようなかんじで、メイドRさんと逆のパターンです）。また[あ]で大きく母音が開いていますね。全体的にすべての母音をはっきり発音している印象です。上で論じた、大きい声で元気に、という観察に通じているのかもしれませんが。

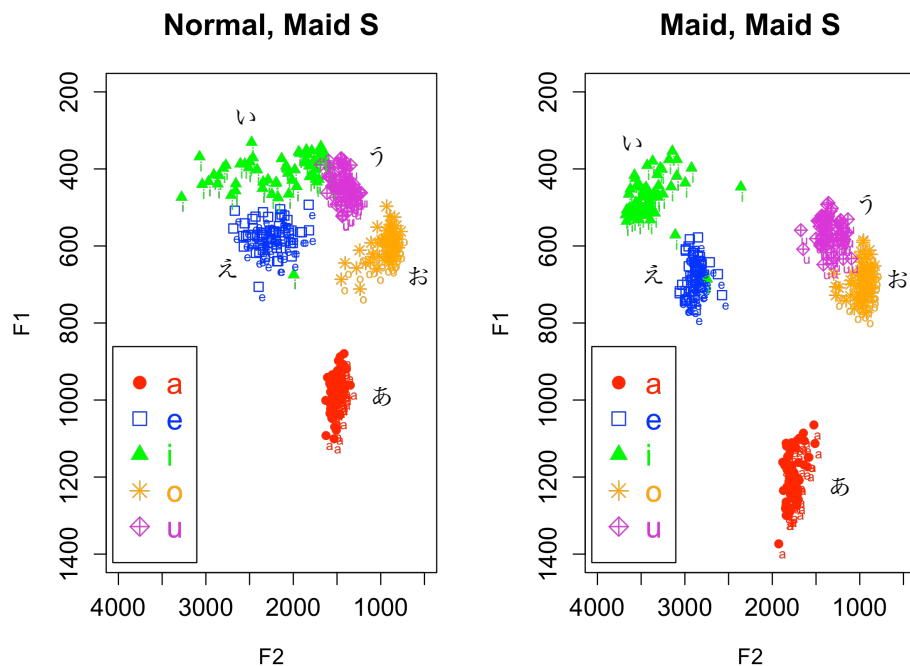


図6：メイドSさんの母音空間

#### 4. 4. 最後に

正直この節で論じた分析はまだまだ探索的なもので、メイド声の音響的な本当の性質を発見するためには、もっとたくさんのメイドさんの声を様々な技術で録音・分析していく必要があります。今の時点では、まだ2人しかしっかりと分析できていないのですが、これからの研究が期待されますね。録音は済んでいるものの分析が終わってないメイドさんや、声優さんにもメイド声を発音して頂いているので、これらの結果は随時発表していきたいと思っています。

ただ、この探索的な調査でも分かったことは数点ありまして、まず上の名前の実験でもはっきりしたことです。メイドさんのなかでも色々種類があるということ。また、ここで論じたような基本的な音声分析の技術を使うだけでも、メイド声の特徴について色々なことが分かるということ。後者の点に関しては、音声学を勉強するときには基本周波数だとか、音の強さ（デシベル）だとか、数学・物理っぽい概念が色々でてきてとつきにくい部分もあるのですが、少し我慢して技術を身につけると、メイド声の分析にもしっかり役にたつ、ということが少しでもこの論文で伝わったなら、と思っています。

## 5. 結論

メイド文化は一般人の目からみると、異質なキワモノに見えるかもしれませんが。しかし、言語学の手法を用いて、その名前付けのパターンや声の出し方をみると、必ずしもおかしいものではなくて、むしろ納得いくことが多くでてきます。これからも言語学を通してメイド文化が研究されることを願っています。

## 謝辞

まず実験に参加して頂いたメイドさんたちに感謝を捧げたいと思います。また、この原稿を書くにあたって、佐野真一郎氏、篠原和子氏、松浦年男氏、桃生朋子氏からコメントを頂きました。最後にこの原稿に挑戦する機会をくださった、たかとらさんに感謝したいと思います。